

市原市立中央図書館

文学・教養講座

*子どもも持参の親御さんにも

聞いていただきたい*

読むこと 書くこと 生きること

作家 早乙女 勝元 氏をお迎え

平成19年2月3日(土)、市原市民会館小ホールで平成18年度 市原市立中央図書館主催事業 文学・教養講座を開催しました。

今年度は、作家の早乙女勝元氏を講師にお迎えし「読むこと 書くこと 生きること」をテーマに講演していただきました。会場には三百数十名の参加者にお出で頂きました。お話の内容は、子どもたちの東京大空襲の被災体験を交え、戦時中の学校生活や終戦後の動乱期のお話をしていただきました。終戦後の十代の頃に古本屋さんで明治期以降の文学作品を全て読破した体験から、良い文章を書くためには、多くの良い文章を読むことが大切であり、それは、自分の中に良い文章を貯めて行くことになる。「良く読み、良く書くことは、良く生きることにつながる。」との、お話をいただきました。

- ・ 調査、研究の資料を集めること(特に郷土資料)
- ・ 地域の情報センターであること。
- ・ 娯楽の場であること。

と、提示されました。中央図書館も早乙女先生のお言葉を胸に活動して行きます。

平成19年度も市原市立中央図書館の主催事業を各種開催いたします。皆さまのご参加をお待ちしています。



早乙女 勝元

太平洋戦争末期の昭和20年3月10日、東京は大空襲で一夜にして焦土と化し、10万人にもものぼる人々の命が犠牲となりました。

12歳で被災し、九死に一生を得た早乙女勝元氏は、戦後、町工場で働きながら文学を志し、18歳で書いた作品が直木賞候補となって作家活動を開始。以来、一般市民の戦争体験をつぶさに伝える小説や、国内外で戦禍の地を訪ね歩いたルポルタージュ、児童文学など、ヒューマンイズムを基軸に据えた数多くの作品を生み出してきてられました。

2002年、江東区に開館した「東京大空襲・戦災資料センター」の初代館長をつとめる一方、語り部としても活躍し、戦争の惨劇と平和の尊さを訴え続けています。